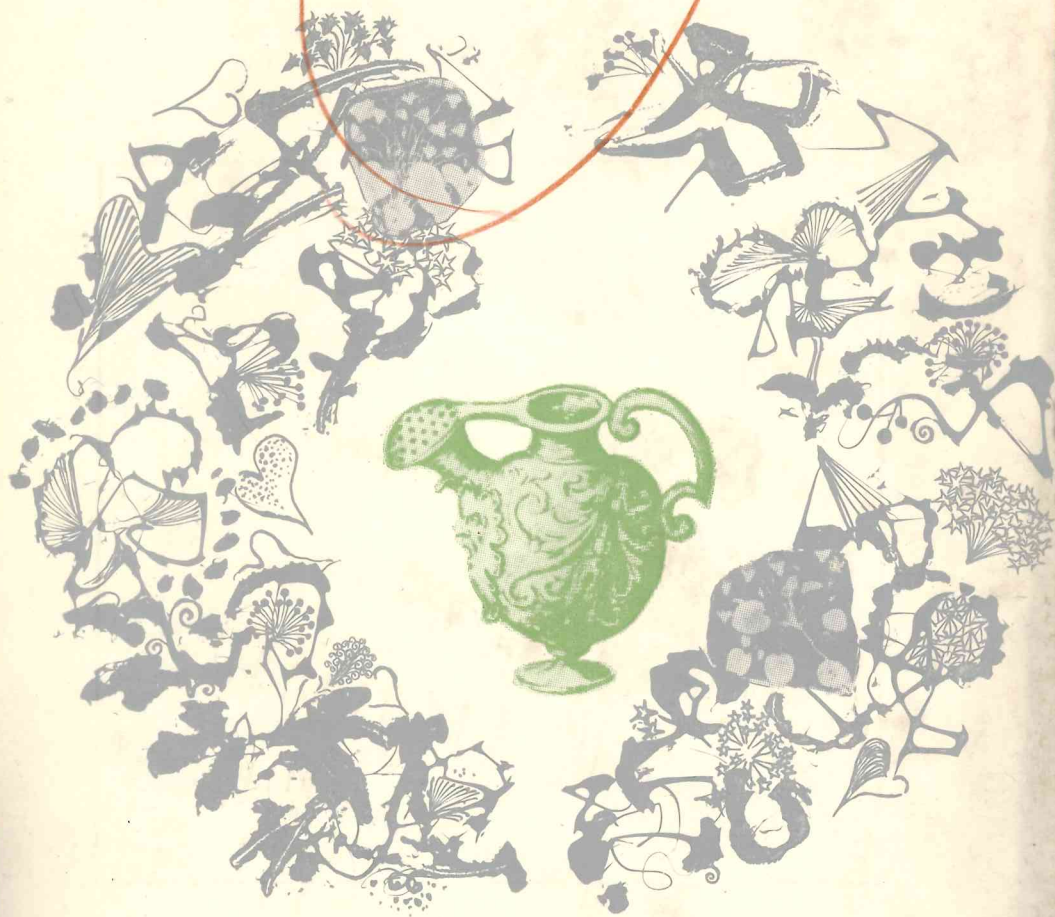


花影

3

1965



花影発行所

〈新しい西武〉は土地からエネルギーまで 明日の生活様式のすべてを販



'65年の〈新しい西武〉百貨店
 ループは 明日の生活に役
 すべての夢とプランを用意
 ■ショッピングなら=SS I
 から世界のエスプリまで
 ■明日の住宅設計なら=—
 から燃料まで
 ■あなたの生活圏をひろげ
 マイ・カーからホテルまで
 ■あなたの会社の発展に=—
 務器からユニフォームまで
 ■新しい社会の発展のため
 花嫁教育からヘリコプターの
 利用まで

池袋・木曜定休
 電話
 東京
 (981) 0111
 大代表



SEIBU 西武

歌集「搜神」をよんで

田中克己

先年なくなったわたしの父は古い「心の花」の同人で、生前一万首の歌をつくった。「心の花」に歌をのせる前は、作家丸岡明氏の先考九華（名は桂）氏の主催する「莫告藻」といふ雑誌に書いてゐた。これはどんな雑誌かわたしはしらべても見ないが、与謝野夫妻のハガキや短冊が多く父のもとにあり、またその縁戚小林政吉氏とは亡くなられるまで親交があったところから見ると、明星系の歌誌だったかと思ふ。「心の花」にのせた歌はわたしの手もとのひかへでは明治四十三年の八月号に十一首を「浪華の人」といふ名で、せ、大正天皇悼歌だけは本名、ずっとこのペンネームでのせてゐる。去年五十年記念会を行った亡母とも歌でむすばれ、「心の花」の大正二年六月号には父は十二首、母は八首のせてもらつてゐる。そんなわけで同じ信綱門の前川さんとは古くから知りあつてゐたやうである。いつのことかわからないが、「電車で会つた前川さんがお前の詩は見こみがあるといつてたぞ」と聞いたのが、前川さんと父をむすぶただ一つの思ひ出だが、実はわたしはその前から前川さんのことは知つてゐた。高等学校の同級に保田与重郎といふ大学者がゐて、語学・数学以外は何でも識つてゐたが、ある日わたしに「これをよめ」といって『歌集植物祭』を渡したのである。

先つ日に死ぬべかりしが生ありてまた襦袢を着て梅花を見てをり
国破山河在の杜甫そっくりの先生の感慨である。
みづからを敢へて殺すも未来にて或ひは悔しむるときなしとせじ
太宰治が死んだのはこの年の六月のことであらう。汚い死にざま
もしたくないし、何か未来にあるのではないかと、悲観症のわたし
もそれを祈つてゐた。

あしざまにおのが祖国をあげつらふ友多くしてさびしき春かも
茂吉の『小園』『白き山』の出た昭和二十四年の作である。
いくばくか惜しき書物も火焚きつむごき心の冬過ごしけむ
法隆寺の金堂の焚けたのは一月、そのことが反映してゐるのかも
しれぬ。

老いらくの恋といふ語ははやれども節山先生を冒瀆するな
漢学の大家塩谷温先生をこのやうにまもつておいでである。老先
生の晩年を楽しくとの御計画はその後、成らなかつたことは人づつて
に聞いた。

埃風吹き立つ街に口ぬぐひいくたびかぬぐひ石橋わたる

わたしは前年から京都に住まつてゐる。埃風の吹く街は奈良であ
らうが、京都はさらに寒く、大和への通勤には疲労困憊した。その
昭和二十五年の作である。めでたいのは

日向にて近近見ればわれの少女髪やはらかにほのほの赤し
わが肩をかはるがはるに今宵採みくるる二人の子らと野に遊びけ
り

入学する髪やはらかい少女は、この間御結婚されたと仄聞する令
嬢である。これとかはりあつて先生の肩をもむ坊やも、永い間見な

当時わたしは父の書棚にあつた利玄や順の歌集をよみ、ついでに
改造文庫で出た茂吉、赤彦、千樫をよんで、なかでも千樫の「みな
なみの嶺岡山に燃ゆる日の」といふ歌を好いて（どういふわけだか
わからない）嶺丘歌太郎といふ名で保田らと「かぎるひ」といふプ
リントの雑誌を出してゐたのである。保田の見せてくれた『植物祭』
はなるほどわたしを驚かせた新声であつた。保田に返却したあと、
古本屋でも、どこでも見たおぼえない稀覯本になつてしまつたが
幸ひ昭和十四年に出た歌集『くれなゐ』にその一部が抄されてゐ
る。その跋によると『植物祭』は昭和五年の刊行であるが、わたし
の日記では昭和六年一月十日に「佐美雄ばり」と題する一首をの
せ、以下はなばなくその影響を受けた歌をつぎつぎに録してゐる
から、保田のおかげで、わたしは前川さんを歌道では先生と呼ぶな
ければならなくなつたわけである。

先生の今度の歌集『搜神』は昭和二十三年から三十年までの七年
間の作である。わたしはこの期間、近畿を転々としてゐた。近くに
ゐたせいで、一年には一回ぐらゐは必ずお会いしてゐるが、それよ
りも風土時世が思ひ出されて、甚だしい共感をもつてよんだ。たと
へば昭和二十三年の歌にはかういふのがある。

生きがたく艱みつつ来し年明けし元日の午後を眩まくらして
二十二年は太宰治が『斜陽』を書いて一世を風靡した年である。
占領軍治下の斜陽族ならずとも、ちつともめでたくないお正月であ
つた。「眩まくらして」と云ふ結句にわたしは感心し、先生の姿が
よくあらはれてゐると思ふ。

はげまして老いしわがれし声を鳴く如月ごろのからすかわれは
本来作歌が天職のこの歌人もかう歌はねばならない世の中なのだ

いがもう御成人だらう。

見てをりて涙ぐましくなるとありわが子女主人公の小学生の劇
そのころ、子どものためだけで生きてゐるのだといつて来た友が
あつた。わたしはさうかなと思ふほど父性愛が薄いのだが、これら
の歌はよんでゐてたのしい。

昭和二十六年は講和条約調印の年で、進駐軍なども少くなり、原
稿の事前検閲がなくなる。追放解除も行はれ、保田なども自由に書
けるやうになつた年である。

妻病みてすでに三年の梅ぞ咲く癒えしがごとく癒えざるごとく
緑夫人は才媛にふさはしくお弱いのである。先生おこまりの御様
子目に見えるやうである。

病妻をとまひて月ヶ瀬の谷くだる梅の花の下むかしの如し
おひな様のやうにならんで坐つていつまでもお歌を作つて下され
ばと思ふ。

てのひらをあげて示せば愛なりき明るきかなや背信はなし
美しい歌である。懷疑的だつたわたしなど一度も歌つたことな
い境地である。

昭和二十六年にはわたしは京都から彦根をへて大阪に住み出し
た。このころから日本歌人の会に招かれて出ることもある。わたし
はもう前川先生が父に予言なかつたやうな「見込のある」詩人でな
いことがはっきりしたが、あひかはらず大切にしていただいたこと
がありがたかつた。その先生にこしばらくお会いせず、御家族に
もお会いしてゐない。奈良の東向北通を突当つて左に折れば先生
のお宅である。一度参らうと思つてゐる。『植物祭』の新人が『搜
神』では日本一の巨匠になつてをられるからである。

◇編集後記

待ちかねた春です。わが名司会者渡辺久子さんからのお便り

我家の貧弱梅が他家の花の二分の一ほどの直径をもって咲きました。ボサボサ小でまりや、咲かずの桜にいじめられて気の毒のあんばいですが、時々四十雀が来て鳴きます。

夏はほたる秋は虫。うらやましい限りです。みんなで梅見に押しかけましょうか。

田中克己先生から歌集「搜神」のご感想をいただきました。たいへんご好意で感謝しております。父君も母君も歌人であったことが文中にもありましたが、この歌の申し子のような田中先生のお若いころの作品は私の作品の師でもありました。

この道を泣きつつわれの行きしことわが忘れなば誰か知るらむ
字がちがっているかも知れませんが、ことは間違っていないと思います。

片山恒美様からは「檀花集」の批評をいた

だきました。日本歌人の古い先達であり、前川先生の作品のこの上なき理解者でもありませんから、きつと私たちのよい勉強になると思います。特にお願いして快諾をいただいたものです。以後各作者にわたってつづけて頂くはずです。

「心の花」の歌人 栗原潔子様がなくなりました。二月十六日、心筋梗塞でありました。大正二年に竹柏園に入門されて以来ずっと「心の花」の中のたいせつな女流として貴重な方であるばかりでなく、私たちにとても得難い先輩でした。心からおいたみします。雪のうへをふたわけに吹き過ぎてゆく風の中何にこころの湿る
臈よりしみるは雪のかなしみか消えざる雪は固くこれば
短歌研究にのっていたお作です。

五月は「花影」にとっては五十号となり、好い季節でもありますので吟行会を予定しています。次号に詳報しますが、行先は箱根。だいたい五月十四日、五日のつもりです。そろってご参加下さい。

(宮崎智恵)

「花影」規約抄

- 一、「花影」はどなたでも入れます。入会金不用です。
- 一、歌会は毎月第三日曜日午後一時―四時会場は赤坂プリンスホテル
- 一、会費三方月分三百円を納めて下さい。
- 一、同人は一月二百円以上とします。
- 一、入会の手続、会費の納入、通信、送稿などは発行所あてにして下さい。
- 一、文章原稿は大判四百字原詰稿用紙を使用随筆の場合は三枚半または七枚にまとめて下さい。詠草は、かならず「花影」規定の用紙を使用のこと。
- 一、添削希望の方は二百円封入の上左記選者あて直送して下さい。
- 一、宮崎智恵 武蔵野市西久保三ノ五ノ一三 大伴道子 港区麻布広尾町三 堤方
- ・発行所の住居番号が変更しました。

旧 西久保三ノ六五
新 西久保三ノ五ノ一三

花影 3月号 第5巻 第3号

昭和40年3月1日 印刷

昭和40年3月5日 発行

編集兼 宮崎智恵

発行人 (有)白馬印刷所

豊島区池袋2-931

発行所武蔵野市西久保3-5-13

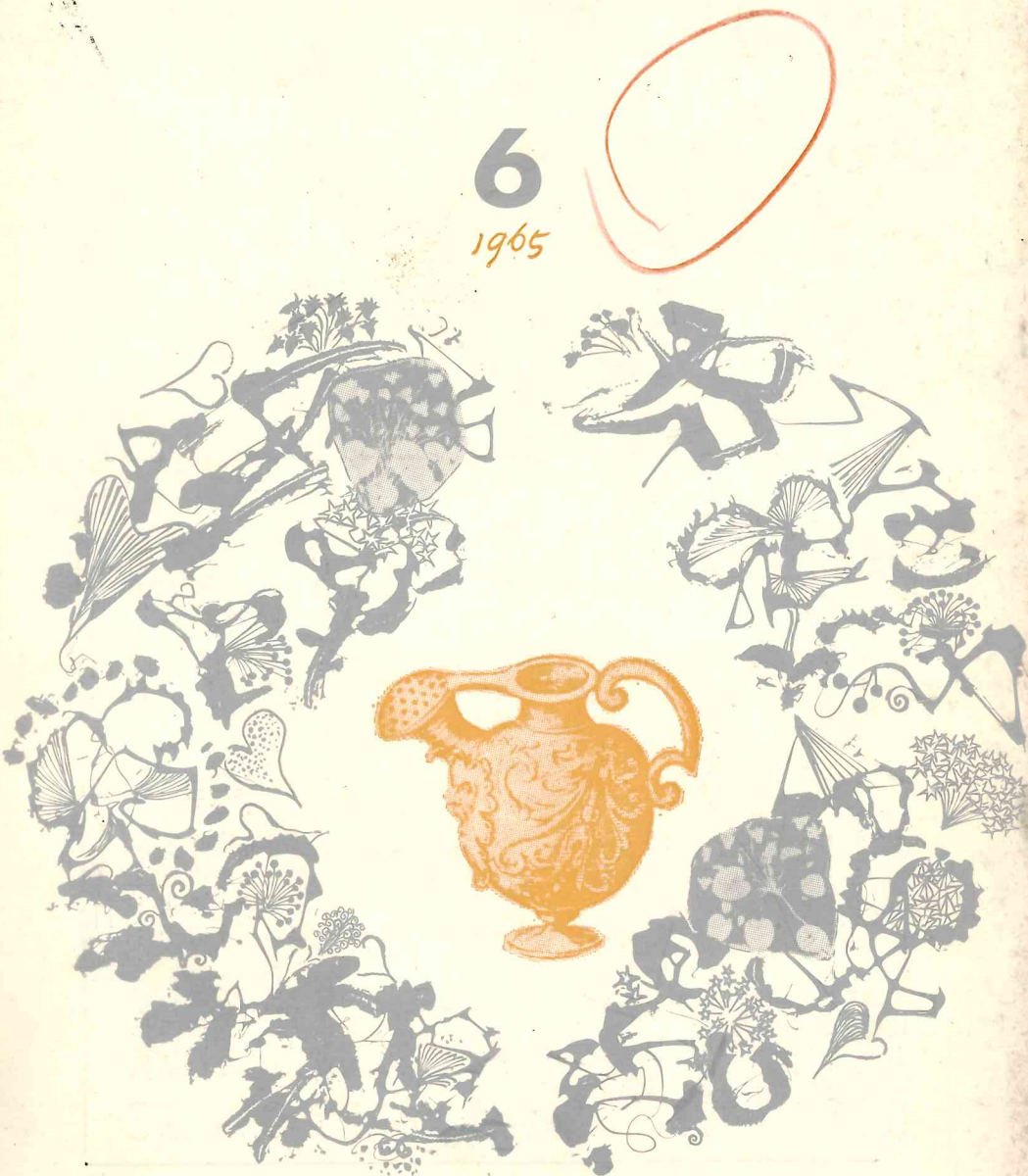
宮崎智恵方 花影発行所

頒価 100円 ㊦6円

花影

6

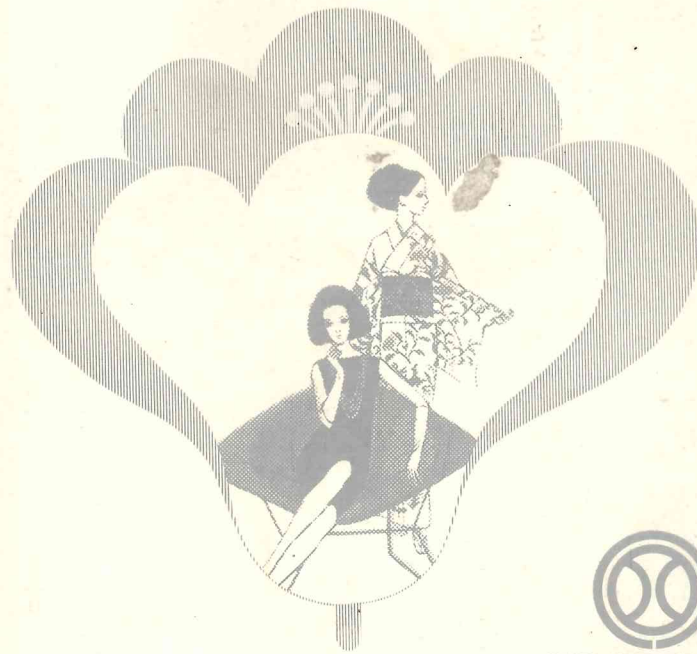
1965



花影発行所

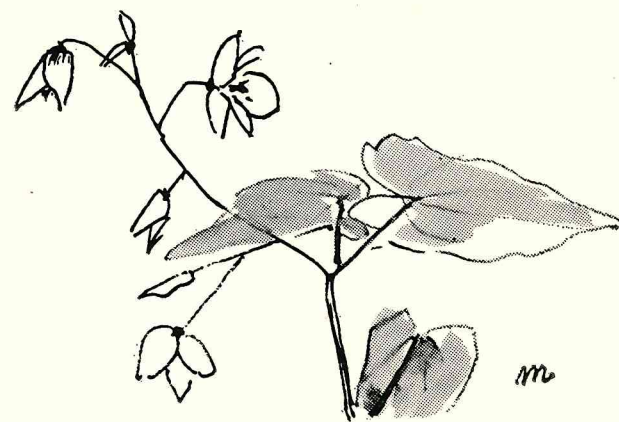
〈飛躍する西武〉は土地からファッションまで 明日の生活様式のすべてを販売

- ショッピングなら=SSDSから世界のエスプリまで
- 明日の住宅設計なら=土地から燃料まで
- あなたの生活半径をひろげる=マイ・カーからホテルまで
- あなたの会社の発展に=事務器からユニフォームまで
- 新しい社会の発展のために=花嫁教育からヘリコプターの利用まで



池袋・木曜定休 電話東京(981)0111大代表





花影 昭和四十年六月号 目次

積日莊劄記	滝つ瀬いづこ	前川佐美雄	(3)
作品I	宮崎智恵	大伴道子	(4)
柳瀬丈子	平山栴美	横山憲一郎	(4)
浦延代	植田道子	高杉幸江	(4)
坂本よし子	中市弘		
浅野	宮崎智恵	長沢美津	(12)
鈴木批評特集	林 富士馬	塩井ひさ	(22)
水無月抄	新田ミツ	水野あづさ	(24)
作品II	永野忠司	桑原一菊	(24)
小原浪子	浅井初江	重藤のぶ	(24)
秋葉ふじ	渡辺久子	工藤浩子	(24)
山本百合花	小野寺三子	辻林美代子	(24)
小野寺三子	辻林美代子	守口忠夫	(24)
花影集	雨のペンハーゲン	大伴道子	(32)
欧州の旅	深山富世	早川静子	(32)
柴田嘉寿江	及川ちよ	坊坂松枝	(34)
大森春子	田中静江	神野美江	(34)
小川まさお	横尾雅世	井上イツ	(34)
平昌芳枝	大月恵以	栗原義子	(34)
太田きく	金山百代	提箸三貴子	(34)
花村ゆき	木田真理子	島田綾子	(34)
大久保静子	村上千恵子	福 芳子	(34)
平沢八重子	佐藤正子	高良容像	(34)
服部はつ	岩崎祐義	田島陸子	(34)
尾崎史枝	田中とみ江	莊 武彦	(34)
小林てつ	宮師双美子	加藤正民	(41)
前号合評		宮崎智恵	(42)
編集後記			(45)

表紙 勝本富士雄 カット 勝本富士雄・大伴道子

積日莊劄記

滝つ瀬いづこ

前川佐美雄

吉野へ行つて一晩泊つた。青葉の吉野は花どきと違つて観光客の姿もなく、店もおほかた戸を締めてひっそり閑としてゐた。夜は谷あひに蛙がしきりに鳴き、峯のはうでは、梟ふくろうの声がしてゐた。翌朝は竹林院の下あたりから斜みくらにのぼつて水分神社の峯つづきを、山越えに喜佐谷きさに下り、吉野川のほとり宮滝に出た。

宮滝の地は、いはゆる吉野離宮趾である。諸説はあるが、通説は一応ここに傾いてゐる。天武、持統、聖武天皇らが特に屢屢行幸され、天皇をはじめ従駕した諸臣の歌、人麿や赤人などの、すぐれた歌が沢山のこされてゐる。それらの歌では、滝つ河内とか滝の都とか云はれてゐるほどだから、当時ここはかなりの急流であり、滝となり滝つ瀬となつてゐたことが想像される。しかし今みる川はしづかである。兩岸の大岩磐は絶壁をなして追つてゐるが、そのあひだの流れは淀んで音さへ立てない。

長い年月のあひだには、流れは相を変へることもある。けれども、明治の半ばごろまではまだ滝をなして流れてゐた。それを水運の便をはかり筏を流すために岩を爆破したので。私の知つてゐる大正中期ごろは、それでもまだ滝は残つてゐた。

この宮滝のほかに、吉野川の沿岸にはなほ滝のつく地名が数カ所ある。上流の川上村には大滝の地があるが、どれほどかと思つて行つてみると、川は深溪を流れてゐるだけである。みんな岩を爆破したので。吉野の木材はかうして筏で和歌山まで流され、そこから大阪へ舟でひいて行つた。この筏は吉野川に景観を添へるものであつたが、今はみたくてもみられない。トラックがそれに代つたのだ。簡単に半日で大阪まで運べる。

筏を流すために岩を爆破さへしなければ、宮滝は吉野離宮当時のやうな景勝の地であつたらうに、トラックのできるのが遅かつたのだ。そこで思はれたのは、水力発電のことである。原子力発電が今すぐ利用できるのではないならば、ダムをつくるのもやむをえない。原子力発電を実用化するまで待つわけにはゆかないからだ。ただしかあふし後のことは充分考へておいたほうがよいと、私は架け替へられた近代的な宮滝の橋のうへに立ち、悠久の流れ吉野川の水を見下ろしながら、人麿の歌をくちずさんでゐた。



あいうえお順

「鈴鏡」を誦む

浅野 晃

『鈴鏡』は大伴道子夫人の第四歌集である。昭和三十七年四月から三十九年十一月に至る、二年半にわたる期間の作品から、年月順に四部にわかち、六百二十三首を選んで成った。この間、著者は夫君の逝去に逢はれてゐる。

かねて前川佐美雄氏に師事し、そのきびしい指導のもとに作歌をつづけてきた著者の精進は、ここに来ておのづから自実の面目を徐徐と打ち出しはじめつつあるかに思はれる。

死と愛と神の住みをするわが内部いたくもひびく琴ひとつあり

男泣きわれが知りたる哀憐の子と父と二人の家の暗がり
悄然と幼な兒は闇に佇みてふかぶかと不審のまゆをあげたり
この「野の家」五首は、第二部のはじめの方に位地し、おはりの方には次の「樹氷」五首がある。わたくしはこの五首を敬重する。わたくしは襟を正してくり返し口誦さむ。

苦しみて大人となりし子ら二人たづさへて来し道いまとほき
み冬空ただひとり来て仰ぐとき山は真白し来しかたゆくへ
かへりみれば母の齢を遠く過ぎ老のよはひを今かぞへつつ
つらぬきしその亡き父の仰せごと樹氷の林かへりつつおもふ
高原にま白く樹氷さく朝は聖いませるごとしとおもふ
これらの五首を口誦さむと、どの一首もみなひびきを返し、また返し合ひつつ、あはれの深さに打たれて止む。ここに及んで、わたくしは作者とともに長歎したのである。

そこで、さきに掲げた「野の家」と、いまのこの「樹氷」との間には、たとへば「辛苦」五首や、「渦」五首や、「満ち」七首や、「壺」五首やのごとく、この世の地獄を凄惨なまでに描がき切り、または修羅道の妄想にいきどほろしい構へを張る。さうした作品がある。それらの中から捨てがたいものをいくつか挙げてみると、

罵られもろびとの石に打たるも一人の父がわが裡に住む
茫として湧き満つ水のゆくすゑの泡のごときを見凝めてゐたる
何者の棲める家かとあやしみぬはげしくわれにそそがれし目に
この最後の一首などはじつに不思議に印象鮮明である。だがまた、これら修羅の悲歌に交って、離脱の時の歌もあること、それらの歌

母となりし日よりかわれにふしぎなる神の言葉のささやかれる
き

甘美なる心をどりをひそませていのちの重き知りしおどろき
まづ、このやうな作があり、これらの歌から次の、

落ちこぼれる露おく花のむらさきのあざやかにして秋ふかみた
り

ふと不意にデリーの熱き夜を思へり足細く黒きはだしの少年
まぼろしに鳴れるしもとが背骨にしひびきて病めり春のゆくこ
ろ

のやうな作に目を移すとき、そのやうな感に打たれる。また、「足袋」と題した十四首の連作があり、うち四首を引くと、

再びは帰らずと決意のこしたる荷物片づけぬ明日発たむ日に
ひとつひとつたたみ納めし小布にも妻なりし日の優しきころ
子を抱き悲しみ多き妻なりし傷痕としてのこるアルパム

たたみ納めて人には言はじ一人の犠牲はながく知るよしもなし
いかにも心打たれる作であり、あとの十首もおほむねあはれが深い。
い。これにつづく「さくら貝」五首も、おなじやうにあはれが深い。

言葉なく簡潔に筐にのこしゆきし娘が遠き日の母へのかたみ
はその中の一首である。つぎの「山川」五首もさうである。そして
このあはれの深さは、第二部ではさらに深められ、いっさうひしひ
しと迫ってくるものがある。たとへば「野の家」の五首がそれであ
る。うち三首をあげてみる。

悄然と四歳の孫が独りゐて留守居せりけり野の奥の家

のなかには、身に沁む佳品があることを云っておかなければならぬ。

いたみをばかばひてくるる優しさにしばしを水の岸に憩へり
病棟の長き廊下のうすあかり何につづけるいまの歩みか
さはやかに人と逢ひたり落葉松の林の道に世をへだてつつ

山すらに苦しき時をもつものかいま美しき紅葉の舞

これらは「薄明の窓」、「病中録」、「浅間山」、「梅鉢草」などの連作から代表の意味で一首づつ抜いてみた。「さはやかに」、「山すらに」などは、秀作というべきである、そのあと、

狂はずに来しが奇蹟と友の言へりわれ狂ひなば子らも狂はむ
幸多くをりたまはむと人言へり否とはわれの言はむかたなし

というやうな作があつて二部が終り、第三部は「花散る朝」一か
ら四、以下「東京駅にて」まで夫君逝去の折の作品がつづく。その
あと、「若葉林」、「野の花」、「桂大樹」。

ほととぎす若葉林を鳴きわたりしづけさもどる有明にして
野の草はすがたやさしくあるゆゑにわれに清しき思ひをはこぶ
胸ただす思ひに仰ぐ神城の桂大樹の経りしとしつき

秋風が浅間を降りて吹き入るる窓べに熟れし山の芝栗

これらの歌みなよい歌である。絶唱といふべきか。終りに第四部
欧州旅行から三首を掲げて、著者の精進に敬意を表す。

廃兵院の屋根に雨降り巴里びとら濡れつつあゆむ寒き夕ぐれ
北の国の舗道しぐれて傘もたぬ旅人われが落葉ひろへり
戦ひは勝たねばならぬものと思ふフランス軍楽隊の行進見つつ

「鈴鏡」読後



田中克巳

大伴道子氏より新刊の歌集「鈴鏡」を賜はった。四部から成つてゐて、第一、第二の二部は御主人の御元氣なころの作、第三部は御主人の急逝を歌ひ、第四部はそのあとといふ構成になつてゐる。

第一部は「死と愛と神と住みをわが内部いたくもひびく琴ひとつあり」といふ歌の示すやうに天成の詩が集まつてゐる。

抱く手に心の重みなかけて祈りし時に子の腫のすめるは本当に母性の愛をうたふ佳作である。

よもすがら欺けうたへといふ虫かわれは疲れていつかねむれりも何か平安朝の女流を思はすうただと思ふ。

霧にぬれし夜明の橋は長くながく一本の道はゆくへも知らぬも象徴のない歌である。

遠山は青くひかりて目の中にわれに生きゆく生きものひそむも同じ趣で、この人ならではの感が深い。

破れたる足袋美しく繕はれ残してありしを誰に告ぐべき

この対象は誰だらう。お嬢さんのやうだが、いまの世にもこんな美しい女がゐるか、わたしは驚く。

言のごとくうそいつはりのない言葉だらう。これをボエジとわれわれはいふのである。

いつの日か此処を終りとする時もあらんとおもひ窓あけりたり「窓あけりたり」が良い。

こまごまと身の廻りなど片付けてまさしくわれは死を思ひひし先の病室の主人公は作者で、「メント・モリ」を笑したたまふのである。

栄光も死しては雲にひとしきを何にあらそひ身をさいなむか野の草にも栄光を見、雲にも栄光を見ることはできないのだらうか。わたしはこの隣人をおかしんで読む。

ひとつ咲く花を清しといま思ふ月日も風も遠く過ぎたりここでは一輪の花に栄光を見る作者がゐる。矛盾か、いやさうではあるまい。罪とおそれは間断なく、といひたいが間断を置いて襲つてくる。栄光はその間断に見られるのが普通だからである。

探りつつわれの心のゆくかたを見送りをれば鐘の鳴りいづこの鐘は警鐘ではあるまい。しづかな山麓の教会の鐘のごとく祈禱をうながすものであらう。

清し夜をみ子生れたまひしと歌ふ子らわれも清しき夜をねがふぞも

ユダヤの野をゆき聖誕をこほぎに来た三博士のごとく、作者も聖誕の祝ぎ歌をうたふのである。子らの声はウィーンの聖歌隊のごとくわれわれの胸を打つのである。

幸多くをりたまはむと人言へり否とはわれの言はむかたなし不幸は言はなくてよいのである。わたしも作者を幸せな人の一人に数へてゐる。この万能、この感受性、不幸などとはゆめにも思はな

枯れ姿みにくき花をかなしみて夕ぐれがたに截りてしまへり何でもない歌だが、ちょっと考へさせる。わたしなら截らないだらう。

わがおもてたまゆらよぎる血まみれの面をしかと子に見られたる

もの静かな大伴さんにこんな面があるのかと驚きながら、わたしも妻子にはずいぶんいろとマスクをしてゐないところを見られてゐると思ふ。

自らの裡につくれる山川にふと清冽に湧く音きけりたいへん強い自我だと思ふ。山川も自ら造る人なのである。

雪降り心内部のひとところしんかんとして雪降りはじめこの雪も作者の作つた雪である。

第二部は一昨年から昨年三月までの歌、わたしはこの間おほむね病んで、作者にごぶさたしてゐた。

色色にも言ふすべもならひたりまつ直ぐに行けぬ人間のなか

からである。かういふ種類の歌は正直にいつて無い方がよい。歌の世界ではないからである。

心の裡にしまひておきし自画像が夜にいきいきとかがやくこと

同じ趣だが、これはよい。ただひとりである純粋に詩人になつてゐるうただからである。

闇にひとり目をみひらきて身の裡の言はねばならぬ言葉さぐれる

題名の示すごとく、いはねばならぬことは証人台に立つ証人の証

い。

さて第三部は御夫君の看護と、急な御逝去とを歌ふ。これは歌をはなれてただ哀悼の意を表するにとどめよう。思へばわたしも多くの友、多くの身内を亡くしたものである。五才の時死んだ母の五十年記念会は昨年行なつた。その席に出た母のいとこは今年の三月、八十三才で亡くなつた。蔵原伸二郎、服部正巳とわたしは追悼文をほとんど毎月のやうに書いてゐる。ただのぞむらくは、この人たちの再会である。わたしは永世天国を信じてゐるので、きっと会へると思ふ。この歌集の題字を書きたまうた新村博士の筋向ひに長らく住んでゐて、昭和三十六年に亡くなつた父は「地獄の方がおもしろいよ」と笑談にいつてゐたが、煉獄へ下りてもこの父とは会ひたいと思ふ。これが夫や肉親の嘆きである。

第四部は二回目の訪歐の歌である。こたびは一人で。廃兵院の屋根に雪降り巴里びとら濡れつつあゆむ寒き夕ぐれナポレオンの墓を見ての歌である。

青春のあくがれ彫りし像はみな空をそあふく光もとめて青年と限りはしないわたしち老人も空を仰ぐ点では同じことである。

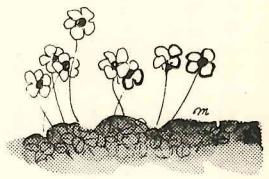
土地のあるかぎり人住み人の住むかぎりかなしみ尽きずと答ふ作者は質問したスエーデンの学生にかう答へてゐる。スエーデンとは肩をすくめたであらう。

国離りはるけき旅をつづけ来ぬさびしさをひとりたしかめむた

さびしさをおたしかめになつたら幸せにおなりだとわたしも思つてこの巻を閉じた。

歌集「鈴鏡」によせる

―かたちをこえたゆゆしき―



長 沢 美 津

大伴道子さんの歌集鈴鏡を手にして藤の花が咲いているかしらと反射的に思った。しぶりがちの陽気もいつの間にか、目をあげると遠くには金枝雀の花が黄に揺れ、近くにはライラックが紫の花をもちあげているまでになった。鈴鏡は第四の歌集のよし、私にはどの歌集かが、どうしてか藤の花と結びつき、大伴さんの歌と藤が大変似つかわしい感じになっていたのである。

言葉にも色あるものかつややかにわれに通へるあたたかきこゑそよ風のごとくも耳にのこりたる言葉よいまもさわやかにありかまへなくゐるとき不意にうしろよりおそひ来たりしかなしみあまた

わが鏡けふは優しきおもかげを映せり心にふかく慰む

も無意味である。その境涯的の体験は願っても得られるものではない、さげようとしてさけられるものでもない。

しかもなほ咲きて匂へり降りつづく雪の中なる紅梅の花
距てなく子が来て坐る椅子ひとつ置くにはせまき暗きわが部屋
気兼ねなく帰り来てひとり住む部屋をひとついづくにか欲しと娘
のいふ

寒紅梅の存在も、親と娘の間にもされる雰囲気も、短歌の上では空間的には刹那の表現にしばらくられてゆく。自然の微妙さに目をみはり、人間関係の絆のなかに息をつめる、そのような瞬間も文字に置きかえるとき、現象再現に止まってはならないこのきびしさを、この作者は知って来た。

木も草もいのちのあればそよぐよと風のある日は風を思へり
無常と題した一連のなかの一首であるが、いつの間にか著者が身につけたゆゆしさをいさぎよしとしたい。

この集の三部に挽歌を、四部に渡歌詠を納めてあり、集名の鈴鏡の一連は遠き世への郷愁と女人の思慕を詠って、この集の主点としてある。

突然に大き荷物^{もの}を失ひしむなしにをりわれのもろ手は
草の上に陽の落す影をみつめたりわれにもいまだ形のありし
形なく声なく色なく大地よりかげるふのごとくゆらぐ思ひぞ
もの消ゆるふしぎをいまも思ひをり所詮は消ゆるわが身と思ふ
胸を打ついくつの鐘よ鳴りひびく日は目を閉じて聞くはかな
し

「花散る朝」一、二、三、四、は忽然と来た偉いなるいのちとの別離である。やや敬語の目だちすぎるくらいはあるが、これも著者の

この辺まで読んで来て私の幻想のなかの紫色の藤の花房がだんだん白色に変わって来た。

更によみすすむと

ひとところ光とどかぬ身の芯にしきりにレンズあてられてをり微笑とも見えしむなしき表情の美しければ孤独を映せり

彫られたる若葉の仏もかげうすれ草中にただの粗石あらしとなる
というの出逢って、作者の全感情が身のうちから流れ去ろうとして音をたてているように思われた。今迄は表側に出ようとしていた才能の目だちが生命力というふうなものに変わって来ているのが感じられる。

やがて弱法師の一連が待っていた。ここで私は息をのんで立ちどまらせられた。能の弱法師は誰でも舞えるものではない。いのちの限界を知った者によって、はじめて表現出来るものである。舞う人自身がよろよろであってはならない。

弱法師があきらめはてしその面にひらかぬ美しと見ぬ

開かねばものなべて見えずゆふあかねまぶたに映しただに憧がるる

歌集は四部に区切られていて、これは二部にある。製作年代順であるかどうかはわからないが、作者はともかくも弱法師を身のうちにうけとめたのである。私はかつて喜多六平太翁の弱法師を観たことがある。恐らく同一人でも出来不出来でなく、舞うごとに変化を覚えるものではなからうか。観賞者の立場にもその変化は反応しあって、舞台に立つ弱法師と、いま一人の観賞者の法師とがもつれあって千差万別無数の法師が生れるところにこの能の深い充実がある。ある境域にまで至っていない者にはこなせないだけでなく、舞って

場合は、嗟歎の声の尾を曳く美しさとなって作者の胸にはずまってゆくようにもとれる。

やがてマロニエの枯葉、プラターナスの枯葉に包まれて巴里の街に立つ作者となる。

北の国の舗道しぐれて傘もたぬ旅人われが落葉ひろへり

スウェーデンの学生われに人生は楽しかりしかと唐突にきけり
土地のある限り人住み人の住むかぎりかなしみ尽きずと答ふ

見まもりてゐるひと天に在りとおもふ哀別の演奏たしかにきき

季節は秋、異国でなされた哀別の演奏の情景は外地詠に密度を与えている。

クレマチスむらがり咲ける石崖いしざしを仰げば見ゆる古き城趾しろあし
気ままなる一人旅なりクレマチスの花を帽子に飾りて帰る

私は忌憚なくいえば鈴鏡一卷は、大伴さんが自らの歌を作るよろこびを得て、自らの存在を疑いもなく生命の充実感に置きかえる転機となった歌集と信じる。

挽歌のなかから立ちあがったのではなく、挽歌を客観から歌いあげて、はからずも完成への起点としたのである。おおけないが万葉の倭大后の挽歌を持つ女性としては例の少ない客観性の強い宏大さ、重厚さに通うものがある。

私は弱法師を舞い了えて橋懸りから引きあげる後姿を、じっとみつめるような思いで、この歌集を読み、心にとどめた。

第四歌集「鈴鏡」

林 富士馬



第三歌集「道」(昭和三十七年五月)にひきつづいて、第四歌集「鈴鏡」が上梓された。新村出博士の題纂で、内容にふさわしく、表紙の布地も美しい装幀である。

「生前は、そのひとの厳しい家訓の中で、私個人の生活は一切放擲しなければならなかった事情にあり、ひそかにしなければならなかった私の短歌の為事も、今となっては、亡きひとへ献げる私のたった一つの贈りものとなった。せめて一周忌までにこの集を編み上げ、はるかなる国へ旅立ったひとの霊前に供へたいと、私は思ひ起ったのだ」と、「あとがき」にあるように、著者自身にとって、在来の歌集とまた違った格別の一冊である。従って、奥付けにある昭和四十年四月二十六日という日付けも、かりそめのものでは

なく、意味が深い。

併し、この歌集が特別に私に身近に思えたのは、そういう著者の現実的な環境から出発しての、もうひとつの宣言、「ひとりになってみると、私は、漸く、私のしなければならぬ仕事として、短歌に取組む運命をそこに自覚した。そして、私の短歌は、私でなければ出来ない為事でもあることを、強く知った。残された生命の日々を、私は、短歌の仕事に打込む心組みである」という覚悟と自信とに就てであった。

そういう著者の出発につき従って、私は気楽に、何度もこの歌集を繰り返し読み、

美しきバリの歴史の石畳むかしこの国に偉人生れし

湖と森とをつなげる橋の長く架かりその橋いくつわが渡り来し
私は著者に導かれ、見知らぬが、憧れている異国というものを、そして著者と違つて、私は多分一生それらの土地を踏むこともないであろうその国々を、「クレマチスむらがり咲ける石崖を」「コンコルド広場にたてる噴水の灯いろ」を、「橋多きヴェニスを」旅して、多くの日々を哀しみを忘れた。

橋多きヴェニスの町をゆきめぐり細き古りたる路地に迷へり
そして、何ということもなく、「異国にして涙あふれき」という感慨を持った。尤も、著者の場合、その前の方の句は、「遺影を前に哀別の情奏でければ」となっているのである。

この歌集が、挽歌を中心にして編まれたのは当然である。蓋し、日本の抒情詩と云うものは、死者を慕い、死者を呼びかえすために歌われた挽歌から、おのずと相聞のうたも発生して来たと聞く。そう云えば、著者は、第三歌集「道」に於ても、「今この集は、師の

霊前にささげなければならぬ」として、先師吉井勇を偲んでいたことを思い出す。今度の歌集にも、歌われている。

短歌の道の上にあつても、著者がよい師友にめぐまれていたことは、その歌集を通じて私にも想像出来る。私は少しも遠慮することなく、思ったことを忌憚なく開陳する蛮勇を持っているのだが、松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」ということがある。具体的に、個々の作品を鑑賞するのに、蛮勇だけではどうしようもないであろう。「私の短歌は、私でなければ出来ない為事でもあることを、強く知った。残された生命の日々を、私は、短歌の仕事に打込む心組みである」という著者の覚悟に励まされ、勇気づけられ、得手勝手なことを、いま少し書く。

著者は、おのれの生活環境を、日常現実生活の思いもかけぬ苦悩や歎きを、「告白」といったような形式で

罵られもろびとの石に打たるも一人の父がわが裡に住む
君耐へたまへこのわざはひの火に焼けし重き荷ひもいましめと
して

などと強く歌われる。

耐へて立ち寝もやらぬ目に昨日の涙を微笑につつむ表情

折折を忍びの灰をまき散らし山は自らの生をたしかむ

併し、私はそういう作品よりも

新しきひとつの歌をくちざみ生れし小鳥をそと抱へをりぬ
と云つたように、どっちかというところ、この歌集のなかでは「軽み」とでも見るべき作品の方が好きである。作者の苦悩のなかから、作者の新しい生命のある作品が、そ知らぬ顔をして、まるであどけない小鳥のように、少女のように飛び立って行くのである。

ふと不意にデリーの熱き夜を思へり足細く黒きはだしの少年
尾を立てて思案の栗鼠の眼のなかに山ふきわたる夕風のいろ

空も花も小鳥もなせるわが窓の朝の挨拶を君に贈らむ

読者はあまりに私の好みに執して、子供っぽいのを笑われるかも知れない。併し、この端麗で、いつでも自分というものを崩さない「重み」に堪えているように見ええるこの歌人のなかに、

船室のおしたにききしきやかなる朝の挨拶は波にとられき

そういう「波にとられき」というのが、「うらめしい」と怨ずるより、「微笑ましい」気がし、心がはずみ、私にはなつかしいのである。こういうところ、「傑作」が製作される以外にも、うたの世界の怡しきがあるような気がする。

わがおもてたまゆらよぎる血まみれの面をしかと子に見られた
る

子もわれも峻しく生きてかなしみはひとり夜ふけの歌に記しぬ
という一面と

あたたかに春の雪すこし降りし夜は優しきひとのゑと思へり
という一面とが、おなじ作者だが、「光と影」のように、私には目についた。

潔くひとり発ちゆく美しく生くるに難き母の国をあとに

そして、歌集の最後は

ソンドラを見つめつづけて帰り来ぬ日本よ小さく優しと思ふ
「生くるに難き母の国」そして「日本よ小さく優しと思ふ」と、この歌人は詠う。

詩神よ！汝、我が畏敬するこの歌人を、嫉妬することなく、大切に護りたまえ！

歌集「鈴鏡」

— 諦感のたていと —



宮崎 智恵

歌集「鈴鏡」で、歌人大伴道子ははじめてその久しくかぶりつづけた面（おもて）を、みずからの手で取りはずしてみせられた感がある。

水のある庭に鳩舞ふ朝朝をよるこぼす声のきこえずなりぬ突然におとずれたあの悲しみの目を境にしてむしろはじめて、その本名の堤操に立ちかえられたようにさえ見える。

「鈴鏡」はその後記にあるように、亡きひとの霊にとどけかしと、一周忌にまにあわせて編まれた。「花散る朝」と題した三十首は、この集での圧巻であるばかりでなく、作者の全作品の中でも、のちに残る名歌だと思う。

この春の花の美しさ思ひたりふたたびは見ざる爛漫なりき
童巻に乗り天上に消えしかとこの忽然を疑ひやまぬ

き鮮やかではあるが、はかないのだ。美しい作品である。そしてここには何か救いもある。

かまへなくなるるとき不意にうしろよりおそひ来りしかなしみあ
また

作者はつねに見つめられている。善意の眼も、そうでない眼もある。見られているということは心の疲れるものである。身構えつづけていて、その隙におそいかかるかなしみでは、やりきれないであろう。

昨夜頬を滂沱とぬらせしわが涙鎖しし扉をたしかめながら
なに不自由なく見える夫人の内部に、どれほど激しいかなしみが秘められていたことだろう。心を揺さぶられるうたである。結句に悲しみの深さを言いつくしている。

風葬になさむと思ふわがこころ小鳥よ風よついでばみてゆけ
ここにも作者の一面がある。かるがると詠うと見せて、実は深い諦感なのだ。

狂ひ咲きの花が小雨に濡るる見ゆもの憂く重き一月の庭
花をこよなく愛するひとであるが、狂ひ咲きはあまり好きではな
いらしい。一月、たまたま作者に、ものういことがあった。

しかもなほ咲きて匂へり降りつづく雪の中なる紅梅のはな
しかもなほ——という唐突ともみえる初句を、たくみだと思
う。距てなく子が来て坐る椅子ひとつ置くにはせまくらきわが部屋
ここが私の部屋です。もっと近くに、もっとしばしば、我が子を
招じ入れたいのに、と心の風景を詠まれたものである。

かなしみを見られたくなし野に向き
て黒き眼鏡をかけて歩める

思ふことのすべてをわれに告げおきて身をいたはれと言ひしは
昨日
ことしこそ花や咲かむと待ちがてにゐたまひし藤も咲きてうつ
ろふ

突然に大き荷物を失ひしむなしにありわれのもろ手は
張りつめた銀の糸のような、かなしみのうたは「伊吹の空」につ
づく。

蛙なく背戸の水田の片ほとり松風ききて君ねむりたまへ
抱へもつ壺は小さしうすがすみ伊吹を空にあふぐおん墓
いつくしむ人よかなしみの眸のいるを明日は見するなわれは切
なし

「鈴鏡」には過去に上梓された三冊の歌集のいずれにも見られな
かったしかもそれがほんとうはこの作者の姿でもある、と思われる
ような作品が数多く見られるが、しかもなお数の上では斎藤正二氏
のいうパラフレーズ（言い替え）された作品が主体となっている。

雪降りり心の内部のひとところしんかんとして雪降りはじむ
この冷たさはどこからくるのだろうか。ふしぎと心にずん、としま
てくる冷たさである。しんかん、ということばが、さらにそれを助
けている。

涙垂る音としも思ふ白梅のそこはかとなく散る寒の土
くるぐるとした寒の土である、あまりに黒い土の上に散っている
梅の白い花は、私のおとす涙の音なのです。

ま白き輪を描きて棲みをり鳶よりも五位鷲よりも寂しきひとり
白鷺の化身のような作者は、ここよりうちに入ってはいけません
と、魔法の白い輪を描くのだが、地に棲むものの描く輪は、いっと

これは大伴道子作品の過去形である。そして今はここから脱皮さ
れていることと思う。

堅琴にふれたる人の指にて摘まれし花の歎喜ぞ匂へ
意味はよむ人により、どのようにも解されよう。集中数少いけん
らんたる作風である。

われと言ふ似るものなき一人の激しき性を父はのこせし
男の子であったならと、父君を嘆息させたという作者は、激しき
をつらぬきとおす稀有な女性のひとりであろう。

実を拾ひ冬の仕度をする栗鼠のいのちよ小さき仕合せもつか
尾を立てて思案の栗鼠の眼のなかに山ふきわたる夕風のいろ
作者の愛する軽井沢未明山荘での作であろう。のびのびと自由
にうたわれている。リスの仕合せをのぞきこむひとの目は、くるくる
といたずらっぽく動く。

空も花も小鳥もなせるわが窓の朝の挨拶を君に贈らむ
かるやかに口をついて出たうた。

形なく声なく色なく大地よりかげろふのごとくゆらぐ思ひぞ
さびしなど思ひてはならず人間はかくのごとくに常孤りなる
この身さへ問なくま白く氷結せむかかかか思をなせわれのする
いづれも大伴道子作品のたて糸となっているきびしい諦感で、こ
の作者だけのものである。

気ままなる一人旅なりクレマチスの花を帽子に飾りて帰る
橋多きヴェニスをゆきめぐり細き古りたる路地に迷へり
ソンドラを見つめつづけて帰り来ぬ日本よ小さく優しと思ふ
昨秋の訪敵の旅からは、たのしくやさしい作品がもたらされた。
「日本よ小さく優しと思ふ」のうたで「鈴鏡」はおわっている。

◇編集後記

五十号記念につづいて、今月は大伴道子さんの歌集「鈴鏡」の批評特集といたしました。

いそがしいお願いでしたが、快よく執筆をお引受け頂いた先生方によって、得がたい文章をそろえられましたこと、深く感謝申し上げます。

展覧会ご出品製作中の鹿児島寿蔵先生、ご病気だった石原八束先生、こちらの手落ちだった寺内大吉先生、それぞれ丁寧なお言葉を頂きました。あわせて御礼申し上げたいと思います。

著者のもとにとどいている沢山のお便りも頂きたいと希いながら紙面の都合であきらめなければなりませんでした。

箱根吟行会は半分は雨にふられました、いつものまにやら降られたことも忘れてしまいくらいに、よい集いでした。大雄山の蒼我の

花は、だいぶみなさんのお気に入った様子でした。不参加の人がたくさん出たことも、近頃にはそんなことのないように、ということに忘れてしまうことにしました。

京都旅行のこと、なんとか実行したいものと只今思案中です。バスが無理なら超特急を利用してよいと思います。いちばん必要なのは参加人員ですから、希望ある方はいちおう申出しておいて下さい。日時その他次号に発表し、十月中旬実行の予定です。

次に事務的なお願いですが、原稿はかならずペンで、はっきりとお書き下さい。鉛筆がき、特に、キヌイトのように細い字は、最近ようやく老境老眼に入ろうとしている私には難儀のことになります。それからよくよくの場合のほかは、ルビはいりません。極端なのは全部にルビがふってありますが、ご注意下さい。

宮崎智恵

「花影」規約抄

- 一、「花影」はどなたでも入れます。入会金不用です。
- 一、歌会は毎月第三日曜日午後一時―四時会場は赤坂プリンスホテル
- 二、会費三カ月分三百円以上を納めて下さい
- 二、同人は一カ月二百円以上とします。
- 二、入会の手続、会費の納入、通信、送稿などは発行所あてに下さい。
- 一、文章原稿は大判四百字原詰稿用紙を使用随筆の場合は三枚半または七枚にまとめ下さい。詠草は、かならず「花影」規定の用紙を使用のこと。
- 一、添削希望の方は二百円封入の上左記選者あて直送して下さい
- 宮崎智恵 武蔵野市西久保三ノ五ノ二三 大伴道子 港区麻布広尾町三 堤方
- ・発行所の住居番号が変更しました。
- 旧 西久保三ノ六五
- 新 西久保三ノ五ノ二三

六月花影歌会

六月二十日(日) 一時より赤坂プリンスホテル(地下鉄赤坂見附)にて行ないます。

花影 6月号 第5巻 第6号

昭和40年6月1日 印刷
昭和40年6月5日 発行

編集兼 宮崎智恵
発行人
印刷所 (有)白馬印刷所
豊島区池袋2-931

発行所武蔵野市西久保3-5-13

宮崎智恵方 花影発行所
頒価 100円 ㊦6円